

橘
ジ
ユ
ン
さん

●特定非営利活動法人BONDプロジェクト代表

生きづらさを抱え孤立する少女たちには、
気持ちを代弁する大人が必要。

社会や家族、周囲の人々に対する不信感により、生きづらさを感じていたり、居場所がなく孤立して
いたりする少女たちがいる。橘ジュンさんが代表を務めるBONDプロジェクトは、そうした彼女たち
の相談に乗り、メンタルケアや保護を行っている。さまよう心を持つ若者の支援や、保健師さんとの連
携について語ってもらった。

●取材・文……………白井美樹（ライター）

居場所のない少女たちの声を
フリーペーパーで伝える

いろいろな背景から、家庭や学校、社会
に自分の居場所を見出せないでいる青少年
は、日本中に数多くいる。孤立した思いを
抱きながら、家を出た彼らが往々として足
を向ける先は、渋谷などを代表とする、混
沌とした大都会の街頭である。

橘ジュンさんは、そんな少女たちを対象
に取材活動が続けてきた。そして、彼女た
ちの声や姿を、パートナーであるカメラマ

ンのKENさんとともに、フリーペーパー
『VOICES』で伝えてきた。

「2005年に『VOICES』を創刊し
たのは、居場所を求めて街をさまよう彼女
たちの気持ちを知りたいと思ったからだ
です。その中には、誰にもどこにも声をあげ
られず、自傷行為、オーバードーズ、援助
交際などに走る子も少なくありません。そ
んな子たちのリアルな声を伝えたかったの
です」

街頭に佇む少女にいきなり声をかけて
も、普通は警戒されるのが落ちだろう。し

ある少女との出会いから
分かった社会の理不尽さ

橘さんは、渋谷の街頭をパトロールして
いたとき、ある少女と運命的な出会いをし
たという。

「どう見ても街になじんでいない少女が、
目の前を歩いていました。話を聞くと、彼

女は17歳で、3日前に東北方面から家出を
してきたのだそうです」

実は、彼女は16歳のときに出産し、相手
の母親に子どもを託し、人生をリセットす
るという名目で渋谷に出てきていた。しか
し、お金も行く当てもなく、その晩はとり
あえず橘さんの自宅に泊めることにした。
「それ以降、携帯電話でやりとりをしてい

ましたが、いつしか連絡が途絶えてしま
いました。その日暮らした生活だったよう
なので、電話料金を払えなかったり、どこ
かで失くしたりしたのでしょう。もう会え
ないのかなと思っていると、偶然、歌舞伎
町のパトロール中に、ホストと一緒に歩
いている彼女に再会したのです」

アルバイトをしながらなんとか生活して

いたようで、それからまた橘さんとの携帯
電話での断続的なやりとりが始まった。時
は流れ、次に彼女に会ったときには19、20
歳になっており、大きな問題を抱えていた。
なんと相手の分からない赤ちゃんを宿して
おり、すでに妊娠6か月くらいの大きなお
腹をしていたのだ。彼女の出産に関わった
橘さんは、そこでさまざまな社会の理不尽
な局面に遭遇することになる。

「どうしていいかわからず、児童相談所に
連絡すると、18歳以上は女性相談センタ
ーに行くようにと言われました。さっそく一
緒に行って相談しようとする、その日の
業務は終わったので、後日来てくれとのこ
と。仕方なく予約をとって、彼女と待ち合



Profile

●たちばな・じゅん●

1971（昭和46）年生まれ、千葉県出身。作家・ライター。ある少女への取材をきっかけに、2005（平成17）年パートナーのKENとフリーペーパー『VOICES』を創刊。居場所のない少女たちを支援する活動に取り組む。著書に『最下層女子高生：無関心社会の罪』（小学館新書）等があり、厚生労働省の検討会で構成員も務めている。

わせをしました。でも、指定された時間が朝で早かったためか、姿を現さなかったのです。夜の仕事に就き、出会った人の家を転々としている彼女にとって、その待ち合わせは難しかったのでしょう」

その後、橘さんが危惧したように、また彼女と連絡がつかない日が続き、さらに2か月が経った。やっと会えて、母子健康手帳を取らせようとしたところ、住所や保険証など身分を証明するものが何もなくだったので、すぐには取ることができなかった。やっと、以前住んでいた場所のガス料金の領収書が1枚だけ見つかり、その場所を現住所として手帳が取れたというのだ。

「その後は、福祉事務所に行くと、安全に出産するための情報をいろいろと教えてくれました。でも彼女の生活は変わらず、結局、タクシーで駆け込み出産したのです。連絡を受けた私は、病院に行き、今後の話し合いをしようと思いました。でも、家族でも親戚でもないので、話し合いに参加させてもらえませんでした」

その顛末として、赤ちゃんは安全のために乳児院に行くことになり、彼女は病院から姿を消してしまったのだという。

相談者と支援者をつなぐ BONDプロジェクトを創設

この少女と関わったことが、橘さんの心を大きく動かすことになる。

「街の中で本当に困っている子に会って、ただ話を聞くだけではダメだと思いました。一緒に動いて代弁者になってくれる大人が、どうしても必要だと痛感したのです。そこで、生きづらさを抱える女の子たちと支援者をつなぐ役割をするべく、2009年にBONDプロジェクトという特定非営利活動法人を立ち上げたのです」

BONDプロジェクトでは、虐待、家出、貧困などさまざまな困難を抱える女の子に寄り添い、主に「聴く」「伝える」「つなげる」という活動を行っている。メール、電話、面接などで声を聴き、VOICES、イベント、講演などで情報を発信し、必要な場合には弁護士と連携し、行政機関や他の専門機関につなげていく。シェルターも設け、保護の活動も行い、「動く相談窓口」として、全国各地を飛び回っている。

そうした活動が、TV、新聞などのメディアで紹介されると、コンタクトしてくる女の子もどんどん増えていった。そして最近

では、行政から委託を受けて、事務所以外に、荒川区でも週に3回相談室を開くようにもなっている。

「BONDプロジェクトは今年で10年になります。当初は3人で始めた団体ですが、今はスタッフも増えて21人になりました。でも、その間、世間では私たちの活動に対し好意を示してくれる人ばかりではありませんでした。『非行少女でわがままな子にどうして手を差し伸べるの』と言い放つ人もいました。そういう人は、家出というと非行としか捉えられません。家に居られるようだったら、家出なんかしていないということを分かっていないのです」

そんなふうに、世間や社会の冷たい反応も多かったが、橘さんたちは、一貫して「目の前の女の子を大事にしよう」「できることを一緒にやっという」と、活動してきたのだ。

すると、次第に社会や世間の反応が変わり、そういう子も支援しないといけないという考え方が、少しずつ湧き出るようになってきたのだ。

「今では公の機関から事業もいただけるようになっていきます。そして、私は、厚生労

働省の『困難な問題を抱える女性の支援のあり方に関する検討会』や、内閣府の『DV等の被害者のための民間シェルター等に対する支援の在り方に関する検討会』に構成委員として参加しています。そういう会に出てみると、行政にいる人たちは、これまで何かやらなかったのではなく、実態を知らなかったただけなのだと感じられます。やはり声を伝えていくことは大事だと、つくづく思いました」

保健師さんなど行政と連携で きる相談室を全国に作りたい

日本全国に出張面談に出かけているBONDプロジェクトでは、各地で保健師さんたちと連携して活動することも多くなってきているようだ。

「地方の場合には、就労のことやメンタルのことなどで、情報量の多い地元の支援者さんにつなぐということも行っています。

相談者の女の子の中には、BONDのことは信頼してくれていても、いざ行政の相談窓口に行こうと言うと、恐がる子が少なくありません。そんなときに、保健師さんと一緒に来てもらうこともありますね。女の子にとって、行政の中でいちばん安心で

きるのが、保健師さんのようです。無料で相談できるし、情報も豊富ですし、訪問もしてもらえます。私たちにはできない、親との間にも入ってもらうこともできます」

ただし、保健師さんの中には、たまに相談者に寄り添ってもらえない人もいます。困っている人は助けようという思いはあっても、切実な悩みなのに、単なる親子ゲンカくらいに捉えられることもあるとか。

「もつと相談者の背景に関心を持って、自分の考えを押し付けるだけでなく、相談している子から学ぶ気持ちを持つてほしいですね」という橘さん。最後に、今後の活動目標について尋ねてみた。

「今は活動が東京中心ですが、行政と連携できる相談室を全国に作れたらいいと思います



少女たちのリアルを伝え、社会とつないできた媒体『VOICES』